

# 高齢社会における高齢者の社会参加

和田 修 二

## 〔抄録〕

昨今の高齢者第二現役世代論には、現役世代とは異なった高齢者ならではの人間の問題と徳についての配慮が欠けている。日本の高齢者の今日的な課題は、「魂の根本的な転回」をともなった国政と教育への参加で

ある。

キーワード 老人、余生、近代化、円熟、覚、態度価値、教育愛

## 目 次

- 1 高齢社会の展望―高齢者第二現役世代論をめぐって
- 2 現代文明と若さの崇拜―社会史的にみた老人の明暗
- 3 老年の意味と老人の徳―哲学的人間学的考察
- 4 日本の高齢者の今日的課題

### 1 高齢社会の展望―高齢者第二現役世代論をめぐって

御存知のように、わが国は今や本格的な「少子・高齢社会」となり、近い将来、国民の四人に一人が高齢者になると予測されている。それにもなつて、政府や地方自治体を初めとして、各界で俄に関心をもたれるようになったのが「高齢者の生きがいと社会参加」の問題である。そこで私自身もすでに高齢者の仲間に入っているので、一高齢者としてこの問題を考えてみたい。

高齢者は老人福祉法では六五歳以上、老人保健法では七〇歳以上の者を指す。また「高齢化した社会」とは、国連の定義によれば、六五歳以上の人口が全人口の七パーセントを超えた社会のことである。現在わが国は、平成七（一九九五）年の統計で国民の平均寿命が男七六歳、女八〇歳、全人口に占める六五歳以上の高齢者の比率が一四・八パーセントである。また、国立社会保障人口問題研究所の平成九（一九九七）年の推計によれば、今年から老年人口が若年人口を上回るようになり、二〇二五年には高齢化率二七・四パーセント、二〇五〇年には実に三二・三パーセントに達するという。

高齢社会化は、国民の平均寿命の延長と出生率の低下が直接の原因であるが、これはわが国だけでなく欧米等先進工業国に共通の現象ということが出来る。それというのも、これらの国々では、技術革新と高度工業化、経済成長による人々の生活水準の向上が平均寿命を伸ばし、婦人の解放や職場進出、教育の高度化高学歴化が、少く生んで手厚く育てようとする「少子化」を促進するからである。そして日本の場合、戦後に始まったこの高齢社会化のテンポが極めて速かったのが特徴である。

高齢社会の到来が人類にとっては未曾有の経験であり、それがもたらす副作用がわれわれの想像を絶するものとなり得ることは、私の記憶ではすでに一九六〇年代末から七〇年代初めに、一部の人々によって指摘され、警告されていた。アメリカの経済学者ドラッカーの『見えざる革命』（邦訳一九七六年）や、吉田寿三郎の『日本老残』（一九七四年）はその一例であろう。

ドラッカーは、この高齢社会化、より正確には「退職年齢に達した年

金生活者層の増大」がもたらす衝撃を、われわれの思考の習慣を打破く巨大でしかも人々がまだ気づいていない「見えざる革命」であるという。彼によれば、高齢社会の出現は、「就業者の貯蓄が高齢者の扶養にまわされて資本形成にまわらなくなる」ため、「貯蓄と投資が一致すると想定していたマルクスも含めた古典的な経済学と経済政策を単に陳腐なものにするだけでなく非生産的なものにしてしまう」。彼はそこから、将来の問題は政治的な「イズム」や「体制」の違いではなく、「生産性の向上」にあり、わけても知的労働の生産性をいかに高めるかが課題であると書いたのであった。<sup>(1)</sup>

吉田寿三郎は、平均寿命の延長に伴って、もしわれわれがこれまでのように老年を人生の終り、「実生活から退いた余生」と考えているかぎり、今後われわれはますます長く無意味な「老残」の生活に耐えねばならなくなる。そうなれば単に就業者の経済的な負担を増すだけでなく、精神的社会的に新たな深刻な問題が起るだろう。老年の問題は、物質的な老後の保障だけでは解決にならない。老人福祉は「人間の尊厳性」あるいは「人間の生きがい」の問題との関連で根本的に見直されねばならないと書いている。<sup>(2)</sup>

しかしながら、当時はまだアメリカとソ連をそれぞれの中心とする東西世界の政治的イデオロギー的軍事的な対立、換言すればイズムと体制の違いにこだわる「冷戦」の最中であり、また、アメリカでのベトナム反戦運動や中国の文化大革命に影響されて、反体制的な大学紛争が国の内外に昂揚した時期であった。そしてこれを境に、その後世界の各地で、それまで社会的に抑圧されてきた少数派の人権や、環境保護に対す

る関心が高まり、既成の政治体制やイデオロギーの違いを超えて、個人や集団や組織の自主性を最大限に尊重しながら、全人類の共生と地球環境の保全を目標に、より柔軟に思考し連帯しようとするさまざまな改革解放の運動、いわゆる「新思考」<sup>ベレストロイ</sup>が起ったことは周知の通りである。

こうした流れの中で、わが国では私の印象では老人問題や老人福祉、高齢者も対象とした生涯教育についての論議と出版物が増え始め、特に一九八〇年代後半、昭和六〇年代以降に急増したように思う。いまそれらの所論の詳細や動向の内実に立入って論ずることは私にはできないが、高齢社会を二一世紀の避け難い課題として受けとめ、高齢者の生きがいと社会参加を真剣に考えなくてはならないこと、そのためには老年に対する見方の転換、「新しい高齢者像の確立」が必要なことは、今や各界の人々に共通した認識になりつつあると言つてよい。

いったい高齢社会における高齢者の生きがいとは何であり、彼等の社会参加はいかにあるべきか。これは老人福祉や生涯教育を推進する立場にある人々だけでなく、われわれ高齢者自身の大問題であるが、この点について現代日本の行政当局者や各界の有識者といわれる人々が何を考えているかを示したのが、『心豊かで活力ある長寿社会づくりに関する懇談会』の報告であろう。<sup>3)</sup> この懇談会は厚生省の依頼で平成八年四月に発足し、八回の討議を経て本年三月に最終報告をまとめている。

この答申の目的を私なりに要約すると、大別して三つとなる。即ち(一)二一世紀を「高齢者の世紀」と考えたとき、まずどのような新しい高齢者像が必要か、(二)高齢者の生きがいと健康をつくり出す活動とは何か、

(三)それを実行支援するためにはいかなる施策が必要かを論述することであり、その最大の眼目は新しい高齢者観の提唱にある。

この答申によれば、従来高齢者というところすぐ介護の問題に関心が集りがちであったが、実際には「高齢者の八・九割は通常は介護や援護を必要とせずに暮らしている」。したがって、このような「比較的元氣な高齢者ができるだけ健康を保持し、その意欲と能力に応じて普通に社会とかかわりを持ち続けることは、要介護高齢者の問題と同じように重要」であつて、今後は「高齢者のパワーを集約し、社会の中になまなく組みこんで行くことが不可欠」である。そのためには、われわれは高齢者を六五歳以上ではなく、「七〇歳以上」とし、また、単に高齢者を社会的弱者、福祉サービスの受益者とみるのではなく、退職後も「より自由な立場を生かして働き、楽しみ、社会に貢献する」ことのできる「第二の現役世代」と考えるべきだ、というのである。

答申はそこから、高齢者に主体的積極的に「若い世代と共に地域社会とかかわりを求め、これを支えようとする意欲的な取組みの姿勢をもつ」ことを求め、同時に他の人々には「高齢者のニーズに合った就業の場の確保と高齢者向けの職業訓練」の条件整備、「高齢者に対する大学高等教育機関の開放」、「定年退職後の地域への適応をめざした現職時代からのライフプランや地域活動」への理解と関心を求めている。

答申は次いで「生きがい」の意味を「自己実現」と捉え、生きがいは「個人の価値観に根ざした、個人の生き方にかかわる極めて主観的なもの」、したがってそれを実現するために何をするかは個人の自由に委ねられるべきものだとして述べている。ただ、人間はもともと人々とかかわ

りの中に暮しているのであるから、生きがいづくりが個人の問題であるとしても、「人々と共生し、社会的連帯を図る」という意識をもちながら活動する」ことが大切だという。

このような生きがいについての解釈と共に、この答申は「高齢期においては、若い時に比べて心身の機能低下が全くない人は稀れ」であるから、「生きがいづくりと健康づくりを一体的にとらえる」べきであるとして、健康づくりの活動を重視している。そして、こうした観点から、高齢者の生きがいと健康づくりのための方策を、各地で試みられている具体的な活動の例をあげながら論じて居り、その範囲は高齢者のための健康、スポーツ、趣味、地域行事の世話や生活改善運動への参加法、高齢者の互助活動、高齢男女の交際や結婚相談にまで及んでいる。

以上が大まかな答申の紹介であるが、これが日本の高齢者政策の最新の将来展望であると考えたとき、皆様は高齢者としてどのような印象をもたれるであろうか。

先に述べたように、この答申の最大の眼目は、老年を「余生」と考え高齢者を専ら要介護の社会的弱者とみる通俗的な老人観を超えて、高齢者の中でも退職してから七〇歳頃までの比較的元気な人々を念頭に、彼等を「第二の現役世代」として積極的に社会参加させようとしていることである。こうした提案の背景には、(一)高齢者がそれぞれ異なった考え方や生き方をもった身体的・精神的・経済的に幅のある集団である。(二)核家族化と高齢化が同時に進むことによって、高齢の夫婦のみの世代や一人暮らしの高齢者が増えており、これからの高齢者は否応なく自立して生活することを求められるようになる。(三)したがって高齢者の一人一人がで

きるだけ長く、しかも主体的に生きて行くという生き方が広まれば、社会もより明るいものに変えることができるはずだという懇談会の認識と期待がある。

私はそうした懇談会の認識や期待に特段の異議はないし、答申が高齢者の自立と積極的な社会参加をあたりまえと考える意識変革を提唱しているのはよいことだと思う。確かに今日の日本では、退職後も元気に働ける力をもった高齢人口が増えているし、彼等にとっては引き続き適切な働き場が保証され、その経験や技能、趣味を活かして社会的に活動できることは、疑いなく生活を明るく生きがいのあるものにするであろう。また、国家や社会にとっても、出生率の低下による労働人口の恒常的な減少が見込まれる折から、それを補う意味で彼等を現役並みに活用することは有意義であるに違いないからである。

しかしながら、この答申に対するそうした積極的な評価と同時に、私にはある疑問と不満、不安を感じざるをえなかった。それは、このような高齢者に対する見方と社会参加の政策は、確かにまだ「元気な老人」にはよいとしても、では「元気でない老人」としての生きがいと社会参加はどうなるのかという、素朴な疑問と不安であった。

この疑問はまた、この答申のような個人的主観的な生きがい観と、地域社会中心の社会参加の解釈では、元気で働いている老人にとっても本当に納得することができるか、この答申は高齢者の生きがいと社会参加を、高齢者自身の目ではなく現役の人間の目、つまり壮年者の立場と尺度で考えてはいないか、という疑問と不満に通ずるものであった。高齢者の生きがいと社会参加の尺度を、意識的・無意識的に「現役並み」「壮

年者並み」にしている限り、いかに元気な老人といえどもそれを失うのは時間の問題であるからである。

われわれはいかに用心努力しても、いつかは思うようには働けなくなる。「老衰」が高齢者にとって避けがたいものである以上、退職後も現役並みに働けるということは、高齢者の生きがいの一部になっても全部ではない。高齢者が安心してその生を全うすることがするために、高齢者にとって自分が現役並みに働けなくなってもなお、自分にも他人にも意味のある「高齢者ならではの独自の生きがいと社会参加」が可能でなければならない。しかしこの答申には、その点についての踏みこんだ哲学と見解、積極的な展望が欠けているのではないか。私の感じた不満と不安は、最終的にはこのことに尽きると言つてよい。

これに対して、答申を擁護する人々からは、次のような反論がなされるかもしれない。(一)われわれは七〇歳までの元気な高齢者を「第二の」現役世代と呼ぼうと言っているのであって、彼等を壮年や青年と全く同じように扱ったり働けと言っているのではない。われわれは彼等が「第一線としての緊張感から解放される」ことによって得られる「自由な立場」を生かして地域社会に貢献することを望んでいるのだ。(二)これまで高齢者の意識調査では、「社会とのつながりをもちたい」「できるだけ長く仕事を、しかも収入のある仕事をしたい」「働くためには健康でなければならず、健康であるためにも働きたい」というのが日本の高齢者の多数意見である。われわれはこの高齢者のニーズに正しく応えようとしているのだ、と。

これに対して、私は次のように反問することができると思う。(一)確か

にそうかもしれない。しかしそれなら、「第一の現役」と「第二の現役」の質的な違いについて、また高齢者の「自由な立場」について、もっと厳密な定義が必要ではないか。なぜなら日常の用語法では「第二の」は「二級の」という意味に、また「自由な」はしばしば「気楽な」「責任のない」「いつやめてもよい」と同義に使うことができるからである。

(二)また高齢者のニーズに應えるといつても、そのニーズがなぜ生まれたのか、それは本質的なものか周辺のものか、日本的なものか他国民にも当嵌まるものか。われわれは高齢者のニーズであればそのまま受け入れてよいかを批判検討することが必要ではないか。因みに昨行われた総理府の『高齢者の生活と意識に関する国際比較調査結果』<sup>(4)</sup>によれば、同じ高齢者でも、ドイツの高齢者は日本とは逆に、できるだけ早く年金生活に入つて、収入はなくてもよいからそれまでできなかったことをしたいと考えている者が多数派であるという。老後の生活に対するこのような日独の高齢者の意識の違いはなぜ起こるのか。恐らくそこには、二つの国民の歴史と文化の違い、高齢社会の将来や福祉のシステムについての考え方の違いがあるからであろうが、此度の懇談会の答申には、日本の高齢者の意識に対するマクロな視点からの考察と根本的な批判がない。日本の現状をごくざらりと認めて対策を打出しているのではないか。

私がここでこうした点にこだわるのは、ことさらに異を唱えるためではない。高齢化や高齢社会の将来に対する根本的な反省、批判に基くわれわれ自身の未来展望が明確でないと、せっかくの高齢者第二現役世代論も、結局は現状を追認し、現役を補助するだけの高齢者の社会適応

策、若年労働力の不足を補い、年金支給の繰延べや福祉費を切り詰めるための恰好の理由づけに終ってしまふ恐れがあるからである。

## 2 現代文明と若さの崇拜

### ―社会的にみた「老人」の明暗

私はいま、この答申には元気でない高齢者の生きがいと社会参加についての展望がないと言ひ、高齢者にとって真に生きがいのある社会システムを造り出すためには、まず日本の高齢者の意識と現状についての根本的な反省と批判が必要ではないかと言つた。

答申はわれわれが老後を余生と考え、高齢者を一方的な弱者とみる社会通念を変えなければならぬと言ふ。ではなぜ老後は余生であつてはならないのか。高齢者を一方的な弱者とみる社会的通念は、いつどうして生まれたのか。高齢者はこれまで実際にどういう扱いを受けてきたのか。次にこの点を社会歴史的に反省してみたい。

まず、われわれはなぜ今老後を「余生」と考えることを嫌うのか。余生は「余分の生」である。まだ平均寿命が短く、人生五〇が現実だった時代には、七〇まで生きることが文字通り「古稀」であり、それ以後は余分であつたかもしれぬ。しかし平均寿命が八〇になった今日では、老後は余生と言ふには長過ぎる。また、余分には「残余」の意味だけでなく「余計」の意味がある。余計は「重要でない」こと、「不要」「無用」「無価値」「無力」「無能」「厄介」「邪魔者」を連想させる。このような無用者、厄介者のイメージでこれから増加する一方の高齢者を見ること

は、彼等にとつても社会にとつても好ましくない。これが主たる理由であらう。

余談ながら、「余生」と共に最近では「老人」という言葉も、差別的なイメージをもつ言葉として忌避されるようになった。代つて用いられるのが「高齢者」である。しかし、そう言い替えたところで、英語に直せば昔も今も *old man, old people* だし、今の高齢者が昔の老人よりも格段に丈夫になったわけでも賢くなつたわけでもない。六〇になれば目もかすむし齒も弱る。物忘れはするしすぐ疲れる。若い頃のように働かず、程度の差はあつても要介護となるのが *old man* である。それなのになぜ今日の *old man* が殊更に弱ること、要介護となることを恐れたり恥じたりしなければならないのか。

一方、老後が余生だと思われていた時代の老人も、無為徒食していたわけではなかつた。それどころか準現役として応分の社会参加をしていた。戦前はもとより戦後の一時期まで、農村であれば家畜の世話や鳥追ひ、子守りは老人の仕事だつたし、村の行事や寄合ひには「年寄」としての役目があつた。それなのになぜ今日の高齢者が改めて積極的に働くこと、第二の現役となることを要請されねばならないのか。

こう考えながら社会史的にみてみると、近代以前、あるいは近代化される前の社会では、老年や老人になることは必ずしも一方的に無力無用となること、全面的に悪いこととは考えられていなかったことがわかる。例えば古くはプラトンが、『国家』の中で老年は「情念から解放されて平和と自由がたつぷりと与えられる時期」だと書いているし、孔子も『論語』で人生七〇にして「欲するところを行つて矩をこえず」と言

い、老年を単なる衰退ではなく人生の完成期と見る見方をとっている。総じて東洋の文化的伝統の中では、人間も自然に従って生きることがよしとし、老いることを「枯れる」ことと考え、枯れることの中に美と徳を見ようとしてきた。日本の中世の芸道論はその典型であろう。また、江戸時代の町人の間では、若いときに一生懸命に働いて早く息子に家督を譲り、「楽隠居」することが一つの理想であった。年をとっても現役に執着するのはむしろ見苦しいことであり、老人や隠居、年寄は若い者にはない知恵をもった、尊敬に値する者という見方があった。<sup>9(5)</sup>

ではなぜ昔は老人が知恵をもつ者として尊敬されたのか。それは社会の仕組みがまだ比較的単純で人々の生活の変化が緩やかであった所では、仕事と生活の上での経験の多さ豊さが価値をもつからである。もともと、その時でも年寄として尊敬されたのは裕福な家の老人であって、貧しい庶民の老人ではなかったであろう。各地に伝承される棄老伝説の存在が、大多数の老人の現実が弱く苛酷なものであったことを示唆している。ただそれが表立った問題にならなかったのは、老人だけでなく子どもも大人も含めた庶民全体の生活が、貧しく苛酷なものだったからである。

西洋でも、専門家の研究によると、<sup>6)</sup>例えば十六・七世紀までのフランス語には子ども期、青年期、老年期の三つの名称しかなく、老年期は今日よりずっと早く、四〇歳頃から始まるものと考えられ、老人は弱って何もできなくなる反面、経験と権威をもち、榮譽を受けて過す年齢段階とみられていた。また、若者達は力があっても為すべきことを知らず、老人達は知っていても力がないという意味で、老人と若者は互いに

補完し合うものと見做されていた。しかし、その後しだいに老人の評価が低くなり、老人は「偏見に凝り固まった、もはや学ぶ時間も熱中する力もない人間」として思い描かれるようになる。十七・八世紀に流行した人間の生涯を半円の鼓橋に見立てた絵画の中では、老年期は老衰して介護される「恍惚の人」として扱われるようになった。この変化を決定づけたのが、フランス革命以来使われるようになった「成人期」という年齢区分である。そしてこの時から老年期は六〇歳になり、老人は老衰者として、病院や施設に隔離される対象と見做されるようになったという。

このようにみてくると、殊更に老人の弱さや無力さ、介護の必要性を強調した否定的な老人像が出来上るのは、西洋でもわが国でもそれほど古いことではない。近代化以降の社会現象であることがわかる。

では、近代化されることによって何故老人は専ら弱者と見做され、老いることが人々にとって忌むべきことになったのか。その秘密は近代化そのものの中に、更に言えば、近代化の動力となった近代合理主義的なものの見方と生き方の中にある。

近代化は、産業的には工業化、経済的には資本主義化、政治的には民主化という形で進行する生活の全面的な合理化運動とみることができ、この推進力となったのが、周知のように、近代西欧人の理性的な人間観と機械論的世界観であった。この立場をとると、人間はみな本来理性的自律的な存在として自由で平等な「個人」となり、世界は人間の理性的把握と技術的支配を受け容れる「資源」、人間の歴史は正しい理性の使用を学ぶこと、「啓蒙」による無限の「進歩」の過程となる。そし

て、このようなものの見方と信念は、また人類が迷信や貧困や身分的差別に苦しめられていた時代にはすばらしい解放の福音であり、神が世界を創造したというキリスト教信仰の伝統に支援されて広く西洋で受け入れられただけでなく、全人類に妥当するものとして、その後の西洋人の自信に満ちた世界進出と圧倒的な世界征覇を可能にしたのである。

一方、この過程は、積極的に科学技術を学び、世界を計画的に制御改造し、契約によって社会を造ろうとする自主独立の気概と実力をもつ人間が生活の主導権をとること、換言すれば、人間の優秀さ、評価の尺度が、生産的に働くことのできる「若さと逞しさ」「新しさ」にむけられることでもあったから、近代化が進めば進むほど、若さと逞しさ、新しさに欠ける者は、一人前でない者、弱い者として社会の周辺に押しやられることになる。こうして西洋では、アリエスによれば、近代に至って社会的に誕生させられたのが、弱き者介護さるべき者としての「子ども」と「老人」であったのである。

では、近代化以後の戦前の日本では、老人はどう扱われるようになったのか。

近代化はわが国を含む非西欧諸国にとつては、それを拒めば西洋列強の植民地となる他はない選択の余地のないものとして、さし当っては自分達の伝統とは異質の「西洋文明化」として始まらなければならなかった。そこから明治政府の指導者達がまず目標としたのが、西洋の知識技術を採り入れた早急な「富国強兵」の実現であった。それと同時に、近代化に伴う伝統社会の解体、国民のアイデンティティ喪失の危険に対抗するための精神的支柱として、国民に天皇を中心とした家族的な国家観と

家族主義的な倫理を学校教育を通じて徹底することであった。こうして戦前の日本では、老人は家族倫理の基本である「孝」の対象として「弱いけれども尊敬され大事にされなければならない人」と教えられてきたのである。<sup>10)</sup>

この政策は当初はみごとな成功を収めたが、やがて日本が世界列強に伍するに及んで帝国主義的進出に転じたため、日中戦争を経て第二次世界大戦で敗戦、米軍の占領を受けることになり、戦後の日本はこれまでの国家主義軍国主義を反省して平和的な民主国家、文化国家をめざして再出発することになったのである。

しかしながら、私見によれば、戦後の改革に当ってなされたわれわれの反省は、近代化や近代的な考え方の問題性には至らず、当時の言論思想界では戦前日本の失敗を専ら西欧モデルの近代化の不徹底さに、換言すれば日本における前近代的なものの残存に求める意見が主流であった。このため戦後の日本は、日本の近代化の隠れたバランスであった伝統的な制度や生活の基盤を自ら破壊して欧米追従を強化し、富国強兵から強兵を除いた富国の追求に突き進んだようにみえる。

このようなわけで、私は戦後の日本は国家と家族に代って「企業」が中心の「経済至上」の国になったのだと思う。そして、一九六〇年代以降、未曾有の経済成長と物量的に豊かな社会を実現したが、それと同時にさまざまな形の環境破壊や人心の荒廃という新たな問題、いわゆる「近代化の負の負債」に直面することになった。この過程で特に大きな変容を強いられたのが、子どもと老人だったのではないか。

もともと近代化の動力となった近代合理主義的な人間観と世界観は、



その論理的な帰結として、ニイチェが予言した「神の死」と人々の「ニヒリズム」を招来する危険性をもっていた。このニイチェの予見はその後の歴史で現実となり、近代化は地縁血縁の伝統的な共同体を解体して利己的で不安な個人をつくり、その混乱を收拾するものとして新たに集団のエゴイズムを体現して萬能となった「国家」の登場と、国家同士の帝国主義的な覇権戦争を生み出した。私はそれが一九世紀から二〇世紀前半の世界史であり、その負の遺産を戦後も引き継いだのが米ソ超大国を中心とする東西世界の冷戦であったと思う。しかし、戦後の日本の政界や言論思想界の大勢は、いぜんとして欧米モデルの近代化の正しさを疑わなかったために、国際的な冷戦をそのまま反映して国内世論が分裂し、まず学校における道徳教育と子どもの価値観の形成が困難となり、家族制度の廃止と核家族化が老人の居場所を奪い、老人を無力で無用な者とみる老人観を国民の間に一段と醸成強化することになったのではないか。

こう考えてみると、一方的な弱者としての老人を生み出したのは、合理化と進歩を確信し、人間の評価基準を自主性、生産性、活動性にみる近代合理主義的な人間観と社会システムであって、この点の本質的な反省と変更がない限り、高齢者第二現役世代論も老人余生論の変形に過ぎないことになる。したがって、老人が老人であるままに尊厳性をもつような、老人ならではの存在理由と生きがいをもたせる新たな社会システムを創造するためには、近代合理主義的な思考と生活に対する根本的な批判を不可欠とすることになるが、私はその曙光を最初に述べた一九七〇年代以降の世界の新しい動き、つまり政治体制やイデオロギーの違

いを超えて全人類の「共生」と「地球環境の保全」を目ざす政治と社会、文化の総体的な見直しの運動に見たいと思うのである。

この運動は、既述のように、ベトナム戦争を契機に、これまでの欧米中心のものの見方や価値観に対する反省として、まずアメリカの知識人と学生から起った運動であり、またこれまで近代的な思考のモデルと見做されてきた自然科学内部のパラダイムの転換、「科学革命」とも運動するものであった。プリゴジンやケストラーによれば、現代の自然科学は、分子の構造から星雲の進化に至る広い範囲の研究を通して、近代科学の決定論的機械論的なパラダイムを突破する方向に、換言すれば、あらゆるものを予め本質の確定した「閉じたシステム」としてではなく、総てのものが多重に連関して働き合い、全体として絶えず進化している「開かれた、自己組織化するシステム」として理解する全一的動的発展的な世界理解に向っているという。私が高齢者問題と関連してこうした社会と科学の両方の変化に特段の関心と期待をもつのは、「共生」を来るべき時代の第一目標とするということが、「この世界には全くの無用者はいない」「どんなものも、それぞれ他に替えがたい独自のよさと役割をもつことができる」という信念と不二であり、この信念はまた、「物ごとの本質や価値を予め確定したものとするのではなく、総てが互いに連動して全体として不断の進化の過程にあり、その中で物ごとの意味や価値も絶えず生成し変化する」と考えることに通底していると思うからである。

冷戦体制が終った今日の世界には、もはやそれに追従して行けば間違いないような政治の体制や思想のモデルはなくなった。それにもかかわ

らず、いわゆる南北問題や環境問題、人口問題等、世界人類の当面する困難はかえって増大している。われわれはこのことをまずはつきりと認識しなければならぬ。こうした状況の中で、われわれがなお共生を旨として積極的に生きるためには、われわれは「何ものも全く無意味で不用なものはない」という信念に立ち、もう一度自ら物ごとの本源に遡ってその意味を問う他はない。これを老人問題に引き寄せて言えば、いまわれわれに最も必要なことは、近代化以来のわれわれの内なる近代至上主義的先入見を括弧に入れて、年老いた人間の現実をありのままに受けいれ、「老いの意味」と「老人ならではの徳」が何であるかを「自分で考える」ことである。

### 3 老年の意味と老人の徳——哲学的人間学的考察

いったい人が「年老いる」「老年になる」とはどういうことか。それはわれわれにどのような意味をもって経験されるか。われわれは老いの経験を通して、老年の意味と老人の可能性をどのように発見しているか。老年問題に対処するに当たって、われわれはまずこのような老年の「哲学的人間学的な問い」にこたえなければならない。

ここで皆様自身がいつどのように「老い」を感じたかを思い出していただきたい。われわれは誰でも、四〇歳中頃を過ぎると、そろそろ肉体的な衰え、「老化」を感じずるようになる。視力や記憶力の減退に気づき、若い時のように徹夜をしたり速く走ることができなくなつて、俗にいう「四十肩、五十肩」に苦しむようになる。それと平行して、このま

ま行ったら自分はどうなるか、職場の中での先行きが予測できるようになり、人事や経営のからくり、世の中の舞台裏が見えるようになる。また、後輩に先を越されたり、思わぬ配置転換を受けて、自分の思う程には会社も世間も自分を思っていないことを知る。仕事に気をとられていた内に、妻子との心のつながりがなくなっていた。友人や知人の突然の訃報。子どもの結婚と独立。近づく自分の定年。退職してしまえば、書きのない只の人になる。

こうして五〇の半ばを過ぎると、事業に成功した者も失敗した者も、等しく自分の限界を知り、人生の空しさ、「無常」を感じるようになる。そして、この人生に対する総体的な「酔いざめ」「自己の根本的な限界」の体験を境として、この「危機」をどう受けとめるかで老年の意味と老人の姿が変ってくる。

まずこの「老化を認めまい」とする者には、老いはそれまで所有しているものの、権力や富や健康の「衰亡」「喪失」を意味するものとして、老年は「耐えがたく忌むべきもの」となる。そのような人は老いを恐れ、殊更に若さを装って急に派手な服装をしたり、肉体的にまだタフであることを誇示するパフォーマンスを試みたり、これまで以上に仕事に執着する。またはこれまでの人生が本当に自分のものではなかったと考えて、突然の家出や転職、奇行や愚行に走ったりする。また、こうした俗にいう「年寄りの冷水」タイプとは逆に、専ら自分の衰えや不運を嘆き、若さを妬み、僻み易くなり、自分の思い出だけに籠ろうとする老人になることもできる。「老人の繚言」「老いの僻み」といわれる所以である。

これに対して、自分の生命が今や確実に下降し出したこと、自分が体力の上でも仕事の上でもこのまま進めるわけではないことを知って、この「老化を避け難い運命」として主体的に引き受けようと決心するとき、人は初めて「醒めた人」となる。このような老人はこれまでの自分と、自分が執着してきた世界の根本的な限界、移ろい易さ、虚しさを自覚することを転機に、それとは全く別の超越的な世界、変わることにない永遠の世界があることに逆説的に気づくのである。そしてこの全面的な「魂の転回」「回心」の体験と共に、今度はこれまでとは全く違った目で、換言すれば、即今の自己の利害や世俗的名利から離れて、物ごとを「永遠の相の下に」みようとするようになる。

周知のように、孔子は人は五〇にして天命を知り、プラトンは善のイデアの認識を得て偽政者の資格を得ると考えたが、若者でない叡知をもつ人として尊敬される老人は、どこかでこのような人生に対する根本的な「諦観」と「回心」を遂げた人であろう。なぜならシュプランガーが指摘しているように、「叡知」はただ多くの経験をものつのではなく、それを精選して統合することができたときに出来るのであって、そうした真の経験の精選と統合ができるためには、世間的な先入観から離れて真実なるもの、本質的なもの、永遠なもののみに関心する「魂の根本的な転回」が不可欠であるからである。

老年はよく人生の「黄昏」に譬えられる。老いるという経験は、実際的にも日が暮れる経験に似ているのではないか。太陽が落ちて暗くなると、われわれは昼間には見ることができなかった満天の星の存在に気づく。星空は太古からあったし、時にはそのことに思い至ることができた

としても、昼間の生活にこだわっている限り、また実際に陽が沈まぬ限り、われわれは本来にそれを見ることも理解することもできない。

われわれは精神的な存在として、いつも自己自身を超出して自己と世界を全体として把握しようとし、そうして出来た自己と世界のイメージに従って生きようとする。しかしわれわれは同時に肉体的な存在として、いかに努力してもその展望は自分の肉体、より詳しくは自分の肉体を介して世界の中に住みついている自分の位置に制約されざるをえない。この故に若く頑健な肉体をもつために見えぬ世界ができ、弱まった肉体の故に見えるようになる世界もあるのである。本来に真実を知る、「理解する」(realization)とは、機が熟して真実に触れること、そうすることで自らも全く新しくなること、啐啄同時の「理会」として起るのである。

人の世の無常、世間の虚仮に目ざめ、煩惱を放下して真実に生きる「覚り」を得ることは、古来、哲学や宗教の究極の目標であった。かつては限られた哲学的宗教的天才が厳しい修行と思索の末にしか到達できぬと思われたこの「覚り」に、われわれもまた「加齢」のおかげで、加齢の結果である「老い」を正しく受けとめようと覚悟することを通して、それなりに近づくことができるのである。

しかしながら、この覚りに至るだけでは、老いは私的な諦観に終る。老いを正受する者は、この覚りから再び日常的な生活に帰還し参加することができなければならない。御存知のように、プラトンは偽政者の教育を論じた『国家』第七巻の中で、理想の偽政者は哲学者であるべきであって、「公私のいずれにおいても思慮ある行いをしようとする者は、

善の実相を見なければならぬ」と言い、地下の洞窟に住む人の比喩を用いて、物ごとの真相を知るためには世間の臆見に縛られた洞窟の外に出て輝く太陽の光に眼を慣らさねばならぬように、魂の全部を生成流転する世界から一転させ、魂の眼光を上方に向けさせて総てのものを明るくしているもの、善そのものを注視させなければならぬ。また、上の世界に行ったことのある人は、再び暗闇の洞窟に戻って世俗のことを行う気になれず、いつも上で時を過すことを切望するが、彼等は再び民衆のもとに戻って「自分の見たその善を範型として用いながら、各人が順番に、国家を個々人と自分自身を秩序づける仕事のうちに残りの生涯を過すよう強制しなければならない」。なぜなら、統治する仕事を何らすばらしい仕事とみるのではなく「やむを得ない仕事とみなす」者、物ごとの真偽を見分けることに優れながら「支配権力を求めることの最も少い者」が支配者となる國こそ、最もよく治まる國、争いの少い國になるからだ、と書いている。<sup>11</sup> 老年ならではの社会参加とは、老年になることを転機に、このような「魂の視力の根本的な向け変え」、「回心」を伴った「国政参加」でなければならないであろう。

いま、人生のさまざまな経験、試練を生き抜いてきた結果、「醒めた人」となり、脱俗的でありながらも人間と社会に対する積極的な関心と信頼を失わぬ人を「円熟した人」と呼ぶならば、このような円熟した人としての老人の長所、徳とは何であるか。このことについてボルノーが、人間が円熟することによって自ら具有する能力として「晴朗」「ユーモア」「深切」をあげていることに注目したい。<sup>12</sup> ここでいう「晴朗」とは、高く澄み切った空や清冽な水のイメージと重なるも

の静かで明るくのびやかな態度、「ユーモア」は悩みごとを一段と高い所から眺めて軽く受け流す力、「深切」は相手の応答や世間の評価は意に介せず、相手と最も本質的なところで出合い、相手のために本当に必要なことをしようとすると深く静かな親切のことである。これらの徳は、いずれも人生の無常を覚悟して超越的なものへと目を向け変えることによつて生まれるものであるが、そうした徳をもつ人と出会うことでわれわれは不随意的に自分の思いこみやこだわりから解放され、浄化され、これまで気づかなかったより大きな世界へと開眼されるのである。この意味でボルノーがこれらの徳を「円熟した教育者の徳」と呼んでいるのは、高齢者の問題を考えるときに示唆的である。なぜならそれは、われわれが老いを正受し、人生に対する醒めた展望とユーモアを忘れず、静かに真言を語る老人となることによつて、われわれは年老いて働けなくなつてもなお、まわりの人々を不随意的に解放し「教化」する存在となることが可能であることを示唆しているからである。

実際、われわれはいかに努力しても、古希を過ぎ、傘寿、白寿になれば、他人の介護なしには何ごともなし得ぬ「老衰」した人となる。この時期の老人は、その全き依存性の故にしばしば幼児に比べられ、周囲もまた彼等を幼児扱いしがちである。しかし、それは大きな誤りである。人は年老いて運動や記憶の力が衰えても、思考力や判断力が衰えるわけではない。老衰して幼児扱いを受けたり病院に隔離された老人が急速に「呆ける」のは、彼等がもはや自分が期待するような扱いを受けられぬことを知つて「絶望」し、自ら人格崩壊を起すからであらう。幼児には未来があるが、老衰した老人には死があるのみである。この故に老衰し

て希望を失った老人は、しばしば物欲のみとなり、強情をはり、遂には自分にも他人にも無関心となるのである。

しかしその逆に、人は老衰してなまじりの人々に深い安堵と淨福を感じさせるような、静かで穏やかな、威厳のある老人になることもできる。そのような老人は、直接的な活動という意味では何ごともなしえないが、他ならぬ死に臨んだ自分の「態度」を通して、自分にとっての人生の意味と自分の究極的な価値の判断を示すのである。

われわれはここで、フランクフルト<sup>103</sup>が人間にできる価値実現に、実際に財を生産する「創造価値」と、その財を理解し享受する「体験価値」の他に、「態度価値」の実現があることを指摘していること、老衰した人間はその死の迎え方を通して、最後の、しかも最も大切な自分の信念の伝達、社会参加ができることを知らなければならない。

#### 4 日本の高齢者の今日的課題

結局、老年の問題は老衰と死の問題を避けては通れない。死を自分自身の問題と感ずることによって、われわれは初めて否応なく自分の生涯の総括と、自分にとって生きることの究極的な意味が何であるかの回答を迫られる。死が生との姿と意味を逆照射するのである。

老人だけでなく若者もまた、事故や大病を通して死と直面することがある。私も四〇代の頃、喉を痛めて死ぬ覚悟をした経験がある。この時は身内に咽頭癌で死んだ者がいたので、自分も癌だと思ったのである。癌であれば進行は速いので、自分の生命もあと一年位だろう。そう思う

とそれまで自分が頼りにしてきたことの総てが急に色褪せて、空しく虚ろとなる一方、自分が軽く考えていたことや見落としてきたものがいかに貴重であったかに気づいて愕然とし、取り返しのきかぬ後悔に苛まれる。私の場合はようやく仕事の目途が付きかけた時であり、まだ子どもも幼かったので、死を意識してからしばらくは眠られぬ夜が続いた。しかし、そのうちに私は、自分はまだ死んでいるのだ、それがたまたまだここにいるだけなのだと思うようになった。それと同時に世界が確かに違った色調で見えるのに気づいた。そしてごく自然に残された日々を最後まで、できるだけ節制して生きたいと思った。それは生命の未練とは違う不思議な体験であった。その頃偶然手にした『湖の伝説』<sup>104</sup>という本の絵画を見て、三橋節子という画家の身上を知らぬままに、これは死者の目で見た世界だと直感したことを覚えていた。

もともと、私の臨死経験はそこまで、検査の結果、癌でないことが分かると、総てが元の木阿彌になってしまった。しかし、それがその後も持続するか否かは別として、死を意識することでわれわれの根本的なものの見方、価値観の逆転が起ること、自分が自分の理解を超えた量り知れない広がりや深さをもつ人や物とのかかわりの中にあり、そのどれ一つが欠けても今の自分はなかったこと、自分がいまあることがいかに偶然で貴重なものであるか、初めて「いのち」の不思議さと有難さを知ることができるかである。ガルディーニは、あと一時間で死ぬと言われたら何をするかと問われて、「今していることをできるだけいいににする」と答えた司教の話を紹介しているが、われわれは己のいのちの有難さを知って己の生命を最後まで生き切ること、その意味で自分の生涯

を感謝と共に受け容れる最も「平凡」な死こそ、最も「癒<sup>イレイ</sup>された」  
「祝福された」死、「神聖<sup>ケイリヒ</sup>な」死であることを知らなければならぬ。  
われわれが英雄的な死や悲劇的な死にもまして、老衰した老人の静かで  
平凡な死に深く慰められ励まされるのは、彼等の絶対的な依存の姿を通  
して、われわれを超越した大いなるいのちへの彼等の絶対的信頼と感謝  
を、したがってまた、われわれを超越する大いなるいのちの彼等におけ  
る確かな「現前」を直覚するからであらう。

先に『心豊かで活力ある長寿社会づくりに関する懇談会』の答申が、  
人間の「生きがい」を自己実現と定義していることを述べたが、私は戦  
後の日本人の大きな誤りは、この自己実現を専ら生物学的な生命と社会  
的文化的な生活の次元で捉えて、超越的なものとかかわり、霊的な  
「いのち」の問題を不問にしてきたことにあると思う。戦後行われた占  
領軍総司令部による国家神道の禁止は、日本の民主化の一環として国家  
による特定宗教の支持を禁止したもので、本来は各人の信教の自由を擁  
護するためのものであったはずだが、戦後の日本の言論思想界、教育界  
では、神道はもとより宗教一般を反進歩的、反科学的とする見方が主流  
となった。しかし、人々が超越とかかわり、人間を超えるものへの畏  
敬を失えば、後に残るものは確たる理想や信念のない不安な個人と、そ  
の個人の欲求を調整する世俗的で暫定的な社会関係と人間関係のみとな  
る。この意味で私は、戦後日本の民主化は、結局、フェニックスのいう  
「欲求の民主主義」に矮小化してきただけではないかと思う。<sup>66</sup>

もともと欧米の民主主義は独立不羈の個人の存在を前提したもので、  
この個人の背後には唯一神とのかかわりを重視するキリスト教信仰の伝

統があつた。教会の影響力が低下したといわれる今日でも、彼等はこの  
歴史的文化的伝統の中で育った人間として、不正義と信ずるものには断  
固として否を言う強い自我を持ち続けている。これに対して、戦後の日  
本人は自ら超越とかかわりを放棄することによって、以前にもまして  
「隣人との同調」に過敏となり、自分の所属する集団内部での欲望の調  
整、社交に腐心する「内向きの生活態度」に退却してきたのではない  
か。近年における国政を蓄財の手段と考える政治家の出現や、薬害問題  
や原発事故にみる官僚達の驚くべき本末顛倒、自分と組織の利益のため  
に国民を騙して恥じない「滅公奉私」のスキャンダルの続発、子どもの  
世界だけでなく大人の職場や地域の生活の中にも深く根を張った「いじ  
め」の構造、派閥的行動の変形である「異質なものの差別と排除」の横  
行は、超越的なものへの畏敬と応答としての真の「責任感<sup>レスポンス</sup>」を  
軽視した社会の当然の帰結であらう。しかし、欲望的な自己の実現を求  
める「欲求の民主主義」は、プラトンの昔から衆愚政治と通底する危険  
をもつものであつて、われわれは民主主義にはもう一つのタイプ、即ち  
直接的な自己の利害を超越した「善、正義、真理、卓越性といったもの  
に対する献身と忠誠を中心におく民主主義」、フェニックスのいう「価  
値の民主主義」があること、そしてこのような「自己の欲望の最大限の  
満足を得ることではなく、卓越したものを確立し増進させる」ことを目  
ざす献身的な生き方こそ、「文明を再生させ、前進させる方向を示し、  
(不断に変革の) エネルギーを提供する」<sup>67</sup>ものであることを忘れてはな  
らないのである。

ここに至って、私は、前述の懇談会が人間の生きがいを「極めて主観

的なもの」であると断定し、高齢者の「多様なニーズに應える」ことが高齢者の生きがいづくりになると考え、「高齢者の活動の場として最もふさわしい領域は地域における社会参加活動である」と答申しているのは、大きな問題であると思う。この答申の欠点は、「欲求の民主主義」の延長線上で高齢者の生きがいと社会参加を論じ、「価値の民主主義」に対する高齢者の責任と貢献についての積極的な言及がないことであるが、これは単純なミスではなく高齢者の徳に対する本質的な無理解、冒瀆ではないのか。むしろ私見によれば、日本の高齢者の最も重要な今日的課題は、よくも悪くも戦後の日本を創った世代として自らの生涯をふり返り、現役世代の人間とは違った展望と観点に立つて、日本の将来に対する基本方針の決定に、換言すれば「国政」に、積極的に関心し参加することである。また、行政当局者をはじめとする現役世代の課題は、高齢者を自分達とは全く違ったものの見方のできる世代として、積極的に高齢者に聴く姿勢と政治システムを作り出すことである。

近年のわが国では、国民の政治離れ、政党離れが著しく、国政選挙に際しても棄権する者が少くない。これには、今日のわが国が総体的に平和で暮しが豊かになった、政治にイデオロギーが問題とならなくなった、個性的で魅力ある政治家が減ったといった事情があげられるであろう。しかし選挙になっても自分の名前の連呼しかできない候補者を生み、政治をつまらなくしている責任の半分は、明らかに有権者にある。国民が自分の意見をもって政治家や行政当局に具体的に問いを出さぬ限り、政治も政治家もよくなることはない。幸い今日の日本の高齢者には、昔と違って年金と時間がある。したがってわれわれ高齢者が、プ

トンのいう通俗的な「思わくを離れて真実を観ることを愛する者」となり、戦中戦後を生き抜いて来た者のいわば最後の「遺言」として、今最も大切と信ずることを積極的に発言し、国政に反映させるべく行動することは十分に可能であり、また実際にそうしてこそ、「二一世紀、高齢者が社会を変える」と言うことができるのである。

国政の批判者としての高齢者の役割と並んで、われわれが今日ぜひ再認識しなければならないのが、子どもに対する無意図的な「教育者としての高齢者」の役割である。

老人と子どもの関係は、他の大人例えば両親と子どもの関係とは違つた、特別の相互依存関係にある。われわれは年老いることによつて、幼い者小さな者に対する自からなる無差別の愛情をもつ。己れの死を知ることによつて新たないのちの誕生に無條件の歎びを感じ、その発展と連続を切実に希うようになる。子どもは老人にとつて自分のいのちの「再生」であり、老人は子どもを見ることで深く慰められ、癒されるのである。

両親も子どもを愛し、子どもの成長を希う。しかし両親は現役の大人として、実社会の権力関係や利害関係に不随意的に深く組み込まれている。したがって両親は、意識的無意識的に、大人の社会への子どもの適応を暗黙の目標として、また子どもへの直接的な養育者としての自負をもつて、意図的計画的に子どもへの指導や援助を行おうとする。しかし、祖父母には両親のような気負いはない。孫と共にいること自体を喜び、周囲の思惑や受験とは無関係に孫を眺め、童心にかえつて孫と交わることができる。このため孫もまた、何ら身構えることなく安心して祖父母

に接することができるが、実はこのような老人と子ども双方における自然で無意図的な交わりの中で、子どもに対する最も重要な価値観や生き方の伝達、人格的な感化が不随意的に起るのである。

教育というと、今日の多くの両親や大人達は、直ちに学校における授業や成績を連想し、子どもに知識や技芸を意図的に教示するインストラクションを考える。インストラクションに際しては、教える者と教えられる者の関係は一方的な上下の関係になり、そこで教示される内容は教ええられる者にとっては全く未知のことである。したがって、たとえ善意によるものにせよ、大人の側の教育意図、教育意志が強まれば強まるほど、子どもは受身的となり、大人から一方的に管理され圧迫を受けていると感じ易い。この意味で子どもの「早教育」に極めて熱心な今日の両親達は、知らず知らずのうちにわが子に大きなストレスを溜めこませている恐れのあることを知らなければならぬ。この逆に、今日ではまた、大人が子どもを圧迫することを恐れ、子どもの意を迎えることに汲々としている両親や大人が増しているが、こうした大人の態度は子どもにとっては別のストレスを、つまり何が真実か大人の本心が分らぬことによる不安と苛立ちを募らせることになる。つい最近も、息子の家庭内暴力に困った父親がわが子を撲殺するという事件が起ったが、この父親は新聞の報ずるところによると、後者のタイプの熱心な許容的解放的な教育観の持主であったという。管理的と許容的は一見正反対に見えるが、両者に共通している欠点は、大人が「自分の思いこみ」で動いて「子どもという人間」を正しく理解していないことである。

子どもは、ランゲフェルトの表現を借りれば「まだ小さな人間」であ

る。<sup>19)</sup> 子どもはまだ小さいゆえに自分より大きな人間、大人に頼らざるをえないが、同時に既に一個の人格として自ら何かならうと思し、自らはたらくことによって大きくなる。子どもは大人をモデルとしながら、自ら新たな自己と世界を探検し、発見する旅をしている存在であり、この旅には、大人の計画的意図的な教示にもまして、子どもが日常の雑わぬ交りの中で垣間見る大人の偽りのない姿との出会いが大切なのである。そうした幼い日の体験の一例として、私の祖父に対する私の想い出をお話してみたい。

私の祖父は大正から昭和の初めにかけて長らく高等女学校の校長を務めた教育者だった。私の記憶にある祖父は、既に定年で故郷に引退し、悠々自適の毎日を送っている白い口髯を生やしたなかなか威厳のある老人であった。祖父は当時四、五歳だった私をよく連れて、ステッキを振りながら散歩に出かけたが、その事件はわれわれが海岸の松原を散歩中に起った。事の次第をもう少し詳しく話すと、私の祖父は私を大変に可愛がり、毎晩寝物語にいろいろな話をしてくれた。それには祖父の創作もあって、その一つが「野兎を捕える話」であった。それは、「野兎という動物はなかなか用心深くてすばしい動物である。だから野兎を捕えるには、まず野兎を油断させなければならぬ。そこで野兎が居そうな山へ行ったら、まず大きな声で遠くから兎！と呼ぶがよい。そうすると野兎は驚いて目を覚まして聴き耳を立てるだろう。そこで次に、前よりは小さい声で兎！と呼ぶ。それを繰返してゆくと兎は人間がだんだん遠くへ離れて行くと思って、安心してまた眠りこんでしまう。そこを近づいて一気にヤツと捕えればよい」というものであった。それが秋で



あつたか春先であつたか定かではないが、ともかくよく晴れた日であつた。祖父と私はその日生家からかなり離れた海岸の松原まで遠出したのである。松林の中では近在の農家の人達が何人か柴刈をしているのが見えた。その時、突然足もとの叢から野兎が跳び出したのである。驚いた私は祖父の袖を引いて興奮して叫んだ。「おじいちゃん、兎が出た!」。早く兎、兎と呼んで!」すると祖父は本当に大きな声で、力のかぎり呼んだのである。「兎!、兎!、兎!」。兎が私達と私達を呆氣にとられて眺めている農夫達を尻目に、一目散に姿を消してしまったことは言うまでもない。それを見て私は言った。「おじいちゃん、やつぱりダメだったね」。そう言つて私は何故かひどく満ち足りた氣持になったことを覚えてゐる。後年母が私に語つたところによると、祖父は帰宅してからこの事件を母に告げて、子どもというものは本当に無邪気なものだ、と言つたという。

あれから既に六〇年の歳月が流れ、私は当時の祖父と同じ年齢となり、当時の私と同じ年頃の孫をもつ身になったが、今になって私はなぜあの時兎が逃げて失望した筈なのにひどく満ち足りた氣持になったか分る氣がする。私はあの時、他人の目を気にせず真剣に小さな私に應えてくれた祖父の姿を通して、それが作り話であつたことも、現実を作り話を全く受けつけぬことも、祖父の私に対する深い愛も、要するにこの世界がさまざまな次元と意味をもつ複雑なものであることを、人間と世界に対する基本的な信頼を失うことなく一氣に發見し、子どもなりに直観したのである。私が故知らず満ち足りた氣持になつたのは、自分のまだ知らない大きな世界があることと、人間が信ずるに価するものであるこ

とを同時に發見し確認することができたからであり、そうすることで私自身が確かに前よりも新しく大きくなつたことを直覺したからである。そして、それを自然に、不隨意的に可能にしてくれたのは、私の祖父の私に対する巧まざる「誠実な應答」であつた。あの時祖父は私にそれが作り話であつたことを告げることもできたはずであるが、私は今でも、そうした大人の体面や思惑を超えて、童心にかへつて私のために人目も憚らず大声で叫んでくれた祖父を、限りなく懐しく有難く思うのである。

人間の生涯を省みて子どもの教育に最も大切なことは、子どもに人間として生きてゆくことのできる自信と力を育んでやることである。そのためには、子どもが小さい時に、自分は愛されており、自分は決して独りではないこと、自分には信頼できる人々がおり、自分もその人々の信頼に應えて生きることができるとを、具体的に経験させてやる必要がある。この「人間に対する信頼と責任」を身をもつて学んだ者は、その後の人生でいかに苦境に立たされても、人間らしく生きる希望と勇氣を失うことはない。今日の多くの子ども達の不幸は、この人間に対する信頼感と責任感をもつことのできない者、本来自分の最も信頼できる大人であるはずの両親すら信じられぬ思いをしている子どもが増えていることである。

子ども達は、今も昔も、自分を單なる「人材」ではなく、まだ小さく頼りなくてもかけ替えのない「人格」として受けとめ、愛してくれる大人を求めている。篠原助市は、かつて子どもの教育に不可欠な教育愛を論じて「エロスとアガペーの綜合」であると言つたが、子どもには価

価値指向的向上的な愛の激励だけでなく、ありのままの子どもに対する絶対の愛の包擁が必要であり、その意味でわれわれは、両親と教師だけでなく祖父母と老人が子どもの成長には必要であること、老人が子どもによつて深く慰められるように、子どもも老人との出会いによつて故知らず深く安堵し、人生の旅立ちに当つてその究極の秘密を予感することができることを忘れてはならないのである。

注

- (1) P・F・ドラッカー著 佐々木実智男・上田惇生訳『見えざる革命』ダイヤモンド社、一九七六年
- (2) 吉田寿三郎著『日本老残』小学館、一九七四年
- (3) 厚生省『新しい高齢社会の創造―二一世紀の高齢者像とは何か』中央法規出版、一九九七年
- (4) 総務庁『高齢者の生活と意識―第四回国際比較調査報告書』中央法規出版、一九九七年
- (5) 太田素子『老年期の誕生』（宮田登・中村桂子他『老いと（生い）』藤原書店、一九九二年）
- (6) 前掲書・小林亜子『近代フランスにおける老年期の光と影』
- (7) Ph・アリエス・杉山光信他訳『子供』の誕生』みすず書房、一九八〇年
- (8) 中野新之祐『教科書にみる（老人）の社会史』（宮田登・中村桂子他『老いと（生

と）』

- (9) A・ケストラー編 池田善昭監訳『還元主義を超えて』工作舎、一九八四年
- (10) E・シュプランガー著 村田昇訳『人間としての生き方を求めて』東信堂、一九九六年
- (11) プラトン・藤沢令夫訳『国家』岩波文庫
- (12) O・F・ボルノー著 森昭・岡田渥美訳『教育を支えるもの』黎明書房、一九八二年
- (13) V・フランク著 霜山徳爾訳『死と愛』みすず書房、一九五八年
- (14) 梅原猛著『湖の伝説』
- (15) R・Guardini, *Die Lebensalter*, Würzburg, 1959
- (16) Ph・フェニックス著 岡本道雄・市村尚久訳『コモングッドへの教育』玉川大学出版部、一九九五年
- (17) フェニックス前掲書
- (18) 厚生省『新しい高齢社会の創造』中央法規出版、一九九七年
- (19) M・J・ランゲフェルド著 和田修二監訳『よるべき両親』玉川大学出版部、一九九六年
- (20) 篠原助市著『改訂理論的教育学』共同出版、一九四九年

（わだ しゅうじ 教育学科）  
（一九九七年十月十六日受理）